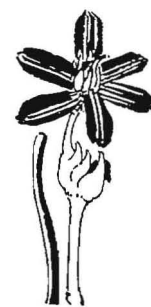


科学という難問に立ち向かう



橋爪大三郎

「理系離れ」が起こっている。若い世代の人びとが、科学(サイエンス)に情熱を燃やさなくなった。科学者としての人生に、あまり魅力を感じなくなったらしい。

これにはいくつか、理由がある。まず、受験競争がこれだけ厳しくしては、ゆっくり実験や観察をしている暇がない。それに、都市化が進み人工的な環境で育った子供たちは、そもそも自然というもの、じかに触れた経験がない。自然を知らなければ、自然を研究してみようという気にもならない。第三に、科学のイメージが、それほど輝かしいものではなくなった。公害や原発問題で悪役にまわったうえ、システム化された巨大科学の時代には、英雄的個人主義の出番もない。おまけに、閉鎖的で風通しの悪い日本の大学の研究室の体質。——これだけ揃えば、それでも科学者になろうという奇特な若者がまだ残っているのが不思議なくらいだ。

*

こんな現状を憂えて、池田清彦氏が若い世代のために書き下ろしたのが、『科学はどこまでいくのか』(ちくまプリマーブックス)である。

この書で著者・池田氏は、科学を「やっぱりすばらしい」と、ただ持ち上げるのではない。そうではなくて、科学とはそもそもどういう営みであるのか、その原点にまず立ち戻る。そのうえで科学

が、未完の壮大な叙事詩であるあり様を描き出す。科学とは、人間の精神が自然に対して取る健全なスタンスのことであると、読者が理解するのなら、本書の目的は達せられたことになる。

そこで著者は、まず、古代(以前)の人類の自然観にさかのぼる。採集→農耕→生産様式が変化するにつれ、自然観も変化してきた。そしてギリシャ。エーゲ文明が解体しそれまでの強固な自然観が壊れたところに、個人的な独創の余地がうまれた。自然科学の原型、ひとつの黄金時代である。

もう一方の柱は、一神教の自然観である。スコラ学は、キリスト教の信仰のうえに強固な物語をこしらえ、ブトレマイオスやコペルニクスの仮説を寄せつけなかった。それをニュートンが乗り越えていった様子を、著者は説明していく。

著者はもう一人、デカルトにも注目する。デカルトの心身二元論と主体/客体図式が、科学の知識累積性(新しい発見がどんどん積み重なって、科学が進歩していくこと)を可能にした。その意味で現代科学は、デカルトの申し子なのだ。

*

こう並べていくと、よくある科学史の解説書みたいに見える。だが、実は随所に著者の独創的な見解がちりばめられており、読み進むにつれて、これまで読者が科学に対して抱いていた常識が揺ら

いでいく仕組みになっている。

たとえば、『コトバと科学』の章。『コトバによる世界の切り取り方には根拠がない』『アヒルとカモの間の類似度と、アヒルとブタの間の類似度は同じ』『コトバは時間を生み出す形式である』といった文章に出くわすと、ちょっとギクリとする。現代哲学の成果を踏まえたまっとうな結論なのだが、いきなりそう言われると、相当頭のよい中高生でも首をひねってしまうだろう。

もうひとつ、著者の主張がはっきり現れているのが、「制度としての科学」の章。科学が社会に組み込まれ、大学で講義されるようになったのは最近のことだが、そのおかげで科学も変化した。『パラダイムが確立して、学会が設立され、学会誌が刊行されるようになると、凡庸で保守的な研究者は有利になるが、天才的で革新的な研究者は不利になりやすい』と著者は断ずる。どの学会も、分裂と細分化を繰り返しながら、研究費の増額を求めてあくなき膨張を続ける。人びとの欲望も新技術・新製品が登場するたびに、ますます大きくふくらんでいくのだ。

ブレイキの効かなくなった巨大科学を「普通の人びとが……コントロールしなければならぬ時代になった」というのが、著者の診

断である。しかもことは、急を要する。われわれのゆく手には、地球環境問題が立ちだかっている。本書の最後で、著者は、何もしない/エコ・ファシズム/環境権売買/地域主義/科学技術文明の拒否、などいくつかの選択肢を掲げてみせているが、どれを採用にしても、それなりのコストを覚悟する必要がある。いずれにせよ本書の問いかけは、若い世代の人びとにとって、これからますます切実になる問題に違いない。

*

こうした困難に立ち向かうために、著者が提案していることのひとつが、専門分化・細分化した現代科学を広く見渡して、一般の人びとに分かりやすくその中身を伝えることのできる、新しいタイプの「学者集団」の養成である。読者のなかからその道を志す人びとが出てくれば、世の中もまだ捨てたものでないと希望を持ってい

(はしづめ・だいさぶろう 東京工業大学助教授・社会学)

ちくまプリマーブックス 89

『科学はどこまでいくのか』

池田清彦

1100円

話題沸騰

布施英利 ポスト・ ヒューマン

死体をモチーフに90年代を解剖する著者が新しい知のスタイルを提唱する、衝撃に満ちた最新エッセイ集。 2000円

養老孟司

●本の解剖学 1・2 ●

脳が読む 本が虫

ご存じ博覧強記の解剖学者がメスをペンに持ちかえて現代の名著200冊を縦横に論じた絶品読書エッセイ。各1800円

仏教30号 性

こころを癒す“エロス”のリエクスタシーの宗教学山折哲雄/宮田登・香山リカ・宮迫千鶴・上田紀行・山田登世子・長谷川真理子他。1500円

生を味わう

佐々木久子 わたしの放浪記

『酒』の編集長が、波乱の半生を数々のエピソードで綴る感動の自伝エッセイ。 1500円

山田恵諦 100歳を生きる

序文=瀬戸内寂聴 昨大大往生をとげた前天台座主が語る人生・平和・いのち。1800円

法蔵館

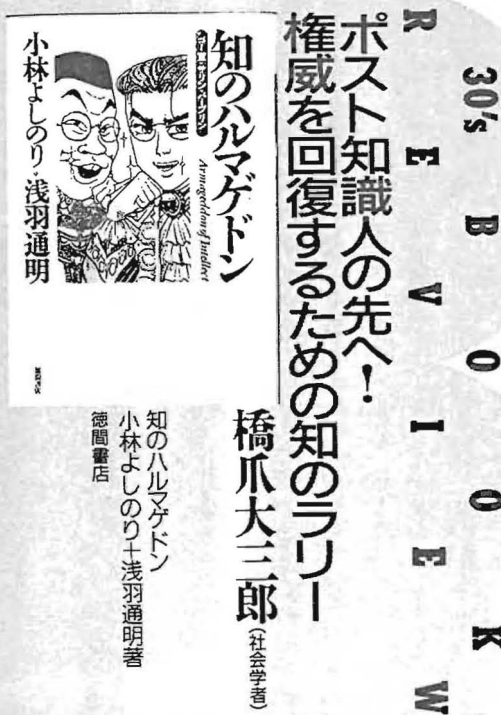
京都市下京区正面通烏丸東入ル
☎075-343-5656 FAX075-371-0458
東京都中央区日本橋中洲11-14-601
☎03-3808-2030 FAX03-3666-6142

片や週刊『SPA!』に連載の『ゴーマニズム宣言』で、新新宗教や差別問題、天皇制といった日本のタブーに挑戦、未踏の領域を切りひらいた小林よしのり氏。片や、『ニセ学生マニュアル』といった裏道から、「正攻法」で思想界に侵入、広汎な支持と共感を集めている浅羽通明氏。この両氏が日本のいまを縦横に語れば、ウィンブルドンセンターコート並みの見応えあるラリーの応酬となるのは当然だ。

まず浅羽氏のファースト・サーヴ。氏は、『ゴ宣言』の大ヒットの理由を裏側から検証、そこに既成のオピニオン雑誌を舞台とする日本の知的言論の衰弱と頹廃をみる。『要するに彼らの論理が、私たちの等身大のところまでかみあつて来なかった』(11頁)のだ。インテリが業界・仲間うちの言葉のやりとりにかまけているうちに、知は格闘技としての実質を失ってしまつた、と浅羽氏は診断する。そうした状況に風穴を空けたのが『朝まで生テレビ』さらにそれを越えたのが『ゴ宣言』だという。

これに対し小林氏は、創作の舞台裏を率直に語り、読者との駆け引きを明らかにする。『ゴ宣言』の強みは現実と同時進行でストーリーが展開、筆者自身(小林氏)も登場し、読者に生で訴えかけていくことだ。その昔、シネマ・ベリテといって、シナリオなしに現実を撮影してしまふ映画があつたが、現像・公開に時間がかかる映画には双方向性を望むべくもなく、成功しなかった。『ゴ宣言』はさしずめ、マンガ・ベリテだが、週刊誌の利点を活かし、毎週、読者・現

実とのフィードバックに成功している。『ゴ宣言』はボレーやスマッシュといった、ネット際のプレーに強いのだ。本書に通底するのは、知識人批判である。といっても、もはや死に絶えた戦後知識人ではない。中沢新一、西部邁、栗本慎一郎、島田裕巳、呉智英、田原総一朗といった、八〇年代以降のマスメディアに登場し、いわゆる知識人の枠をはみ出して読者・視聴者大衆と関わりあつた人びとである。オウム信者の何割かが中沢氏の読者



知のハルマゲドン
小林よしのり・浅羽通明著
徳間書店

だったという話からも明らかのように、九〇年代の読者・視聴者はこれら「ポスト知識人」を自分の知的形成の準拠点としているのだ。ここにどのような知の倫理が求められるべきか? 小林氏、浅羽氏は体験のなかから、それを示そうとしている。

『ポスト知識人』のポストたる所以は、その知的ポジションがメディア状況と密接不可分に決まっている点である。八〇年代以降のメディアは「権威崩壊」をテーマにし、それをやりつくした。そこでは外部性(どこかアカデミズムをはみ出しているなあ、という感じ)が、タレントであることの要件になる。『ポスト知識人』たちは何らかの「外部性」を背景にしながら、知的権威になぐり込みをかけた。ほんとうは知的権威のかけらも残っていないのに、権威に異をとる「ポスト知識人」ばかりが氾濫するという、転倒した状況が当たり前になった。

そうした現在、小林氏のスタンスを、浅羽氏がこう的確に評している。『彼ら(ポスト知識人)は、

浅羽通明



小林よしのり作「ゴーマニズム宣言」(『SPA!』連載)より

……やはり完成した思想＝真理を語るといふプライドから自由でないんだ。その点、小林さんはこの対極にあつて思想を語り始めた。……ただ自分の良識のみを頼りにゴーマンをかましていくしかない。しかし、実はこの永遠の未完成の態度こそは、今もつとも有効でまた支持を集められる思想の方法ではなかったでしょうか(38頁)。いつ終るとも知れぬ『ゴ宣言』の連載形式こそが、本質的なのである。……浅羽氏のスタンスの面白さは、かつて雑誌『ムー』に関わつた「元オカルト青年」の経歴を背負いながら、異種格闘技戦である思想家(ポスト知識人)の闘いを「論評」するという、「公共」言論の場に登場した点である。浅羽氏は、オタク世代のダメさ加減も、そこへ追い込まれるしかなかったメディア状況の必然もよくわかまえていた。だからこそ、そういう読者・視聴者に到達できるかを基準に、ポスト知識人の出来不出来を選別することができるのだ。ポスト知識人が権威崩壊と価値相対主義の産物だとすれば、いま

問題はその先にある。どのように、知の権威、知の社会的機能を回復するか。

権威とは、正しさの基準。情報が進展すると、戦後知識人の権威はもろくも崩れた。彼らの海外のタネ本がつぎつぎ紹介されてしま

つたうえ、彼らが机上で描いた世界像が、現実とどう喰い違ふのか即座にばれてしまうからである。しかし、権威のないところに、知識の社会的効力はない。ここまで進んだ情報化に踏みこたえる思想は、どういふかたちで可能なのか。

平凡であることを恐れるな、という小林氏のメッセージが、ひとつのヒントになる。メディアのなかでは、極端(だけ)がもてはやされる。その結果、読者・視聴者は平均値に押し込められる。そしてそれを、抑圧(と)なんて平凡な私(感じて)しまう。これにめげるかどうか、分岐点なのだ。『普通の日常が退屈で、彼岸ばかり見えて夢を馳せなくなる人間というのは……精神のバランスを崩した病にかかつた……。快感マヒマヒ病』これを浅羽氏は「まずは極めて私的なところから出発する。そこからどれだけ普遍性のある地点までたどれるかで、私の思索のほどが試されている」と受ける。

ポスト知識人たちの出番はもう終わったのかもしれない。そのあとを受けるのは、マスメディアと無縁なペースで自分の課題を掘り下げる知のプロと、読者・視聴者との、水平で双方向の協力関係となるはずだ。そうした課題の広がり、『知のハルマゲドン』は見せてくれたのだ。

1995-49-③/10

週刊読書人

毎週金曜日発行

定価 230円
(本体223円)

発行所
株式会社読書人
東京都新宿区矢来町109
郵便番号162
電話 03(3260)5791(代)
FAX 03(3260)5507
振替口座 00150-9-57070
©株式会社読書人1995

アンケート特集

一九九五年の収穫

橋爪大三郎

震災・オウム・不況で明け暮れた九五年だった。オウムに命を狙われながら持場を守った二人の書物をまずあげておく。

江川紹子『オウム真理教』追跡2000日(文藝春秋)。坂本弁護士一家の失踪このかた、オウムを追い続けた執念の記録。大新聞の記者がとにかく取材もせぬまま、ぬくぬくと組織の水につかり出世し

小林氏はメジャーだが、いまのメディア状況下ではやはり少数派だ。筋を通せば『SPA』をおん出なければならぬ、いまマンガすらはみ出る未踏の地点に立っている。

最後にまじめな研究書だが、落合仁司『地中海の無限者』(東西キリスト教の神人問論)(勁草書房)。

これまでなじみの薄かった東方キリスト教会の神学(神人合一)を、近代数学の無限論をモデルに再構成する大胆な試み。オウム真理教が布教に成功したロシアの宗教風土を知るうえで、本書は貴重な

●ほんとの対話

宮台真司著

『制服少女たちの選択』

評者・橋爪大三郎

講談社
定価一七〇〇円

日)。以下ではこれを踏まえて、論点を掘り下げてみよう。

一九九三年夏のブルセラ騒動。警察の摘発・補導をきっかけに、マスコミの取材合戦と女子高生の新規参入があいつぎ、またたく間に特異な社会現象にふくれ上がった。その渦中で論調をリードしたひとり、社会学者・宮台真司氏の新著である。当時、雑誌に掲載された polemical な論文五編を前半に収め、その理論編とも言うべき消費社会の若者分析を後半に収めている。この一冊で、ブルセラ騒動の見取り図と、それがわれわれに投げかけた問題の拡がりを知ることができるはずだ。

著者が本書でベースとするのは、社会システム論。N・ルーマンの所説を宮台氏がさらに展開したもので、これによれば、女子高生がパンツを売りエッチ系バイトに群がる必然性をわかりやすく論証できるという。

本書を別な機会に書評したところ(『週刊読書人』九五年一月二七日)、著者の反論が寄せられた(同二月一〇

まず著者は、奥井智之氏や松原隆一郎氏らの批判に反論する。両氏は「宮台はブルセラ女子高生たちと『規範的』なものを見方をするがゆえに『市民』的な成熟や『倫理』を説くことができない」としたが、宮台氏はこれに對して、「ブルセラ女子高生たちと『規範的』な場所に立ちたかった……それこそ私自身が確信的にやりたかったことなのだ」と切り返す。どんな営みも「自分が内属する社会システムと共振」せざるをえない以上、それ以外の選択があるのか、というわけだ。

宮台氏のこの選択は、社会システムの高みに立つて倫理を説けると信じている二分法——システムの高みに立つたお説教か、さもなければ女子高生たちと『規範的』な場所か——こそ、戦

後知識人的な発想ではないだろうか。知識人たちは、ブルセラ女子高生と『規範』しては大変と、なんとか高みに立とうとした。氏が倫理を棚あげにしてとにかくシステムへの内属を選択しても、単なるその裏返しである。欠けているのは第三の可能性、すなわち、システムと共振するその場所での倫理的であることなのだ。本来の倫理は、システムの高みでなく、そのただ中にしかありえない。

そこで気になるのは、システム理論をとる宮台氏が、一〇年以上も「自己改造セミナー・超能力セミナー・テレクラ・伝言ダイヤル・宗教団体・社会運動団体・風俗産業などに潜りつづけるのはなぜか」ということだ。

「システム理論が社会システムの一部である以上、社会や時代と『共振』するのはそれこそ当たり前」だと氏は言う。その事実を踏まえるのがまっとうなシステム理論だとしても、その作業はどこでも実行できるはずだ。

それならなぜ氏はここまでこだわって、ブルセラ女子高生を取材し続けるのか。たしかに女子高生は、同時代の社会システムを敏感に映すかもしれない。しかしそれは、女子高生に限らないはずだ。システム理論への内在だけからは、この熱中を説明しにくい。

本書によれば、テレクラや伝言ダイヤルでアポを取り、街頭や場合によってはホテルで女子高生と会うのが取材だという。謝礼を渡すこともある。いかにも危うい。

著者も指摘するように、ブルセラ現象とマスコミは共犯関係にある。摘発を報じたマスコミのおかげで、ブルセラは広まった。日本の社会システムは正当化の観念を欠いているため、マスコミが報道すれば、何となく市民権をえたような感じになってしまふのだ。

とすれば、本書の位置も微妙である。宮台氏の戦略、「『社会システム』の作動の実態」を本人に学習させて各自選択してもらう社会学的啓蒙「そのものが、ブルセラ現象の拡大(救済すべき女子高生たちの増加)を招いている可能性はないか?」氏が謙虚に認めるように、「システム理論……の正当性は端的に無根拠でしかありえず、それが実効的なコミュニケーションに結びつくかどうか……【現実による審判】を待たなければならぬ」のなら、こころが手をひく潮時だと思ふ。私を含む多くの友人が、著者の才能の無駄づかいだと憂えていることを付け加えておこう。

(はしづめ・だいさぶろう/東京工業大学助教
授・社会学)

1995-49-4/10

1995年(平成7年)2月19日(日曜日) 日本経済新聞

SUNDAY NIKKEI

全体主義の時代経験

藤田 省三著

著者は怒っている。怒りを通り越して、ほとんど絶望している。今この時代を覆いつくしている全体主義に對して。

全体主義？ 天皇制ファシズムは過去のものではないのか？ 読者は不思議に思うだろう。だが、著者は言う、われわれは全体主義のただ中にある。安楽への全体主義、A少しくでも不愉快な感情を起させ、もはや全部一掃しなければならぬ。高度消費社会の集合心理が、すなわちそれだ。

二〇世紀は、全体主義の時代であった。ナチズム、スターリニズムばかりが全体主義でない。いまますます世界を巻き込みつつあるA市場経済全体主義もそうである。だから著者は、戦後日本社会が、戦前とそ

今も覆う時流へ怒る「遺書」

本書は『思想の科学』などに、折にふれて書かれた文章を集めたものだが、その読後感、藤田省三というひとりの学者の思つかいも思考の手ざわりが感じられて、さわやかだった。すでに評価の定まった著者がその仕事は個人としての資格で、どんな時流にもおねねならないかたちで積み重ねてきたのだという自負が伝わってくる。

本書の診断が正しいければ、この時代の趨勢は、著者の警告を無視して、このようもなく流れていくはずだ。孤立を覚悟の諫言である。良質な戦後知識人とは、こうした鋭角的な個人主義者たちだったのだと今更ながら思いついた。(みすず書房・二、八八四円)

東京工業大学助教授 橋爪 大三郎



1995-49-④/10

日本経済新聞 1995年(平成7年)6月11日(日曜日)



ハイト・リポート 新家族論(上・下)

シェア・ハイト著

女性が性的満足を得るのに男性は不要という衝撃の調査結果で有名なあの『ハイト・リポート』が現れたのは、一九七六年。著者シェア・ハイト氏はその後、も研究を続け、四冊目のテーマに進んだのが家族である。

今回の調査にも、著者一流の手法が活かされている。アメリカは十六カ国の三千二百八名から足かけ十五年にわたって集めた記述式の解答が、「体罰が残した心の傷」「男になるための訓練」といった主題にそってすらすらと並ぶ。解答を順に読めば、さまざまな家庭のなかで愛と権力がせめぎあうさまが浮きぼりになるはず、というのが著者の意図だ。

あとがきによれば、ハイト氏に對するマスコミの攻撃が近年激しさを増し、研究がしにくい状況だという。『ハイト・リポート』のこの追い風は去り、「家族の価値の復権」が声高に叫ばれている。そんな中、「母親ひとりに育てられた少年のほうか……女性と良い関係をもつ可能性が高い」「父権的な家族でなく「より寛容でより多様な家族のあり方を支持する」とのべる

家族の変容、調査で浮き彫り

本書は、家族の崩壊を後押ししていると思われてしまうのだ。もうひとつ私が感じた危険は、著者がフェミニストとして著名になりすぎて、いわば駆け込み寺(アンケートハイト氏のファンからハイト氏への匿名の手紙)として機能し始め、彼女のもとに集まるデータがたより始めたのではないかということだ。著者は本書で、自分の信念(父権的な家族を解体すべきだ)をますます前面に押し出しながら、アンケートの解釈を展開する。しかし、この図式はフェミニズムではごくごく一般的なもので、それを繰り返すだけだとけっこう保守的な言論にも見えてしまう。

日本の家族病理はアメリカのそれと同じでないけれど、ハイト氏の仮説の当否はわれわれにとっても無視できない。アメリカ家族の「崩壊」は、ハイト氏の言うような家族のルネサンスなのか、それとも単なる混乱か？やがて歴史がそれに結論を出すだろう。ハーディング様子、青山陽子訳。(同朋舎出版・④⑥共、三、三〇〇円)

東京工業大学助教授 橋爪 大三郎

bonton Book Relations

今月は秋の夜長を近頃の出版動向から
ファンクな3冊をネタに「性愛のダイナミズム」について
まじめに考えて過ごそうという企画(だった)。

そこで「性愛論」(岩波書店)の著者
最近では小林よしのりさんとの対談などがおさめられた
「大問題?」(幻冬舎)を上梓した高沢六三郎さんに執筆を依頼。
しかし当初の打合せとはまったく裏腹な内容になってしまった。

だがそんなことはこの際もうどうでもいい。
ことの重大さはやはり本書に登場する人びとへの
詐欺まがいのレイプ疑惑や肖像権の侵害など
製作上の人権的なプライバシー保護への配慮のなさ。
ただ読んで笑ってすまされる問題ではない。
レヴュー・アーティクル以前に先生をそうとう怒らせてしまった。
それでも超多忙のなか書いてくださった3枚の原稿には
「ビョーキの人の、ビョーキの人による、ビョーキの人のための
セックス教本」というタイトルが付されていた。
この場をかりて先生にお詫びならびにお礼を申し上げます。



▲性愛論 高沢六三郎著 岩波書店 定価=2200円
①ナンパ日記 ナンパ教 著者 KKベストセラー 定価=1500円
②セックス教本 著者 ハクシヤ山下 著 本田出版 定価=500円
③ナンパ ナンパ教 著者 ぶんか社 定価=1400円

早い話がこの三冊とも、かなりど
うしようもない。「ナンパ写真」

「AV監督」の題目につられて、なんか
いこと書いてありそうと錯覚し、買って
しまったらいい面の皮だ。「美術手帖」に
書評が出たからまたとなく本が、とかん
んんんんんんんんんんんんんんんんん

そもそも、こんな本を私に書評させよ
うと思いついた「美術手帖」の担当編集
者はなにを考えているのか。たぶん彼も
かなりヘンなのだ。「美術手帖」にしま
て、そうとうヘンかも。うっかり書評を
ひき受けてこんなものを読まされ、私は
怒っている。

まず佐々木敦の「ナンパ写真日記」
著者は三十数年、ナンパに明け暮れる
プロカメラマン(常の宣伝文)で、「投
稿写真」や「スーパースタイル」などの連載
を抱える売れっ子(奥付・著者紹介)だ
という。カメラはプロかもしれないが、
文章のほうはひどいものだ。それでも雄
誌の(売れっ子)なのは、年々入った
「ナンパ術」のおおぼれに預かるうとい

う、さもない読者が多いせいだろう。
本書は、カメラを手にしてからの自
らの半生を回顧したもの。しばらく前、キ
ヤンディーだかミルキーだかいう中年男
が幼児の女装でテレビや雑誌に登場。あ
んなものをテレビに出しちゃいかんと笑
福澤諭吉さんが怒っていたが(まったく
同感)、こつちも相当のイカレ野郎だ。
こんな奴が本を出すこと自体が間違っ
ている。

ナンパのヴェテラン・佐々木氏のパン
チラ写真、似顔絵のもの。それまでの
「アクション写真」(甲子園のチア・リー
ダーなんかを足元から撮影する)や「逆
さ吊り」(小型カメラをスカートの下に入
れて撮る)、「ピーピング」(ソックスをやり
ながら撮る)がみな盗み撮りだったの
に、彼は被写体の女性にナンパをし
かけ、相手の「同意」をえながら撮影す
る。写真を口実に、胸やヒップにタッチ
しまくり、セックスだってしてしまうの
である。あとは(名刺ください)なんて
言われたら、「持っていない」と逃げよう。

「じゃあ住所と電話番号」ときたら……

「ただいま失禁中」など、ヌケヌケとつ
ぱる(が、お決まりのパターン)。(完璧
なフェアプレー精神でおしとおしたから
トラブルも皆無)と自慢するのめい、
写真雑誌に載せるよ、ちゃんと事前
に説明したのか? (考えてみない)

読者諸氏の彼女、妻、友人、妹、ひょ
っとしてご令嬢が、雑誌にスッポンポンで
あらわれたら腰を抜かすだろうに。やる
にこたえて写真を撮っているヤツとカ
ラんでるんだから、まさに晴天のヘキ
レキと書くのだったら、これに限る

とした不法行為(肖像権の侵害)である
ことくらい自覚すべきだろう。レイプと
同じで、相手が泣き寝入りしている(訴
えてこない)からといって、それが犯罪で
なかったことの証明にはならないのだ。

こんな著者をつかまえて、いままら非
道德的だのなんのと非難するつもりはな
い。それ以前に、一刻も早く民事訴訟で
訴えられ、賠償命令を受けて、これ以上
商売ができなくなるのを願うのみであ

ある。

バクシヤ山下の「セックス教本」著者
た「性愛論」の著者高沢六三郎氏が監督した
四十四本のアダルト・ビデオについて、
一作ずつ回顧したもの。文休から察する
に、談話をもとに活字に起こしたもの
と思われる。

山下氏は一九六七年生まれの、二十八
歳。安達かおる監督が社長をつとめるブ
ロダクションで、初監督作品が一九九〇
年五月というから、まる五年半のキャリ
アだ。

AV業界が非常識なのか、このプロダ
クションが特別なのか、山下氏が要なの
かはつきりしないが(たぶんどれもだ)、
はつきりしてビョーキの世界だ。男優
たちは、全国から勝手に面接に集まっ
てくる。AVギルは、プロダクションか
ら調達する。(小便飲んだり、ウンコ食
ったりするだけが、変態じゃない。人前
で堂々と股開いてセックスする女も変態
なんです。AVに出てくるやつはすべてそ
うだと僕は思います。そして僕は、悪い

の場を提供するふりをして、彼らを見世
物にしています。撮影は数日で終わる
が、台本はなく、監督が男優、女優をい
かにだますかがポイント。街角ナンパで
は、ささ失敗した頃合いを見計らって、
用意のAVギルを通りかからせる。男
優たちは素人を本当にレイプできると思
い込んで襲いかかる。そこを撮るといっ
た具合、男優もさう奇妙で、いつで
もゲロを吐ける大男のボン・宇野とか、
山谷のドヤで見た顔の抜けたオッサ
ンとか、いかにも嫌われるタイプの男優
を登場させ、真尿をまき散らしたりして、
女優が本気でいやる表情をねらう。迫
真の臨場感のためというが、フェミニ
ズムの「AV人権ネットワーク」という
団体はほんとうのレイプだと抗議したほ
どだ。ビデオをつくるプロセスそのもの
が、不法行為をそのかす仕組みになっ
ているのではないか。

AV業界の現場の荒廃は、相当行くこ
うまで行っていると思える。アイデ
アに詰まれば、人肉を喰うしかない、
女優の皮下脂肪や男優の包皮を手術
で切り取らせ、担々麺や焼肉にして食
べたりする。こんなビデオを観るやつ
の気が知れない。
この本でやはり気になるのは、関係者
のプライバシーのこと。男優、女優は、
ビデオの出演契約まではしたかもしれ
ないが、勝手にこの本に顔写真を載せられ
本名、出身地、動機などを公開される
ことをOKしているとは思えない。い
ちばんひどいケースでは、投稿マニアが送
ってきたビデオを、そのまま作品の一部
に使ってしまったという。(この人はた
のはめ撮りマニアなんですよ。別れた前
の彼女のストッキングを持ってるらしい
いすから、その前の彼女にしてみれば、
生きた心地がしないでしょうけどな
(笑)ですませられる問題か!

これら二冊とくらべれば(くらべては
失礼だが)、みうらじゅんやりにけい
は、なかなか立派な作品である。

みうら氏は、漫画を描くらしい。文
章もうまい。そしてこの作品は、みこす
り半劇場(という雑誌があるのか?)に
一九九三年十月から今年の五月まで連載
されたものだ。これまでにセックス
した女性の、似顔(十年齢・職業・具
合・関係回数など)から始まり、からん
でいるところを描いた漫画(著者がマ
マ)になっているところがなんとも愛
嬌を湛えて、軽快な文章が六頁。解説
の内田春菊さんが(この本を、ノンフ
クションではなく短編小説集として応援
したい)というくらい(二十期希望の純文
学(帯)なのだ。



は、ああ似てると思えるが、似顔だけ
から本人が割れる心配はまずない。知り
合ったいきさつなど具体的なことは一切
省かれており、シニールな雰囲気さえか
もし出す。これもみうら氏の優しさか。
みうら氏の作品に救いがあるのは、た
とえば今回書下しの「病気の女」で、行
きずりの女に病気をうつされ泌尿器科で
処置を受けたらウンチを洩らしてしまっ
たなどという、だだだっ隠しておきた
いような体験のさまたさを、つき放して

BOOKS

●この本

『日本人の行動文法』——「日本らしさ」の解体新書
■竹内靖雄 著

日本人の行動パターンを集成

「日本見直し論者」「異質論者」「リヴィジヨニスト」たちが日本経済はフェアでないという文句をつけて以来、国際社会の日本をみる目は冷えこんでいる。折しも大和銀行事件が発覚、組織ぐるみの不正と断定され、住友銀行との合併計画まで持ち上がった。また一

たけうち やすお
1935年高知県生まれ。東京大学卒。現在成蹊大学教授。経済思想史、経済倫理学専攻。「正義と嫉妬の経済学」他。
■東洋経済新報社 ■一八〇〇円

竹内靖雄

日本人の行動文法
Barbara Winkler
1995-49-⑥/10



つ、証拠の裏付けがあがったからだ。そんななか、本書は、日本人が決して特別な存在ではないと強調する。「個人は自分の利益を追求し、不利益を避けるという、それこそ『普遍的』といえる原理から出発しながら……」「見ユニークな『日本らしさ』を生み出した」というのが、本書の見方だ。要するに、日本人も合理的というわけで、大蔵省や通産省の役人もさぞ心強いだろう。

本書の特徴は、番号つきの一連の命題やそれへの注記でもって、全体が組み立てられていること。しかも、自己利益をはかる個人から出発して、社会の法則性を導く構成

になっている。スピノザの「エチカ」、ホッブズの「リヴァイアサン」、ヒュームの「人性論」といった、徹底して論理的・構築的な仕事のようにだと期待がわく。

ところがページを繰ってみると、こうした期待は裏切られる。まず、それぞれの命題の論理的なつながりがはつきりしない。「エチカ」の場合のような、証明関係に基づいたような、体系的な見えてこない。それよりも、巻末にあがっている、日本文化論関係書数十冊を参考に、著者が発見した事実（日本社会についての経験的命題）をテーマごとに並べたという感じなのだ。もっと根本的なのは「一・

一・一人はそれぞれ自分の利益を追求する」という普遍命題と、「一・三・一 日本人は状況への適応を第一として行動する」という特殊命題との関係である。日本人は状況を無条件に所与のものと受け取るというが、それは自己利益に基づく合理的な選択なのだろうか。そうではなくて、日本人の行動を特徴づける独立の仮定のような「一・三・一は一・一・一から導き出されない」とすれば、日本人の行動は、自己利益に基づく合理性のみならず、所与の状況によっても説明されることになり、完全に合理的なものではありえない。このように著者の意図に反するはずの命題が本書の冒頭に掲げられていて、理解に苦しむ。

本書の中身をひとくちでいうなら、さまざまな状況のもとで観察される日本人の行動パターンを経験則として集成したものである。なるほどとうなずける命題も多く、著者の観察眼はかなりのものだが、これをもって「日本人の行動文法（ソシオグラマー）」と称することは適当であるまい。文法（グラマー）とは、少数の単純な前提から多数の帰結を導く論理的生産性・体系性をそなえた構造のことであるはずだ。経験則を集めるだけでなく、そこから論理構造を抽出すれば、本書の情報価値はもっと高まるだろう。

この書物をリヴィジヨニストが読んだとして、なるほど日本人は合理的だ、と思うだろうか。逆だと私は思う。ここに描かれているのは、猫の目のように変わる状況に翻弄され続ける、非合理的な日本人の姿にほかならない。

東京工業大学教授

橋爪大三郎

日本経済新聞

発行所 日本経済新聞社
東京本社 〒100-66 〇〇〇33270-0251
東京都千代田区大手町1-9-5
振替口座 00130-7-555番
大阪本社 〒540 〇〇〇6943-7111
大阪市中央区大手前1-1-1
振替口座 00920-1-73217番
名古屋支社 〒460 〇〇〇52322-2561
名古屋市中区正木2-3-1
振替口座 00830-6-5149番
西部支社 〒812 〇〇〇92473-3300
福岡市博多区博多駅東2-16-1
振替口座 01710-1-1248番
札幌支社 〒060 〇〇〇11281-3211
札幌市中央区北1条西7-3
〇日本経済新聞社 1995

『マリ・クレール』は、ここに連載された文章の集成『母型論』から「原了解論」まで十三の論文が並ぶ。

吉本 隆明 著

母型論

本書の大きなモチーフは日本（ヤポネシア）の固有性を、周辺地域や地球大に広がる人類系統・文化伝播の網の目のなかに置き直し、世界性に解消しようというところ。起源を訪ねようとする強烈な意志が本書を貫いている。発生学、精神分析、言語学、文化人類学、遺伝子研究、古代歌謡の考察など様々な分析的手法によって、歴史以前に遡る日本人の集合的無意識が掘り下げられ、そこから日本人が「アイヌ人」「沖縄人」「渡来者」とどのような交錯・分岐の関係にあるかのほろけなイメージが浮かびあがってくる。

本書が、吉本氏の『共同幻想論』『心的現象論』をひき継ぐ仕事なのは明らかだ。そこで考えてみたいのは、いま起源にこだわるこの意味はなにか。

冷戦時代のマルクス主義・左翼思想は、未来に向かって日本を世界に開くという希望を込めた。それが退潮したあと、日本

「起源」に着眼、日本をとらえ直す

化となって孤立し、閉塞（へいそく）している。オウムのような、文化伝統や歴史をまったく踏まえない集団が現れたのも、そうした閉塞のなせるわざだった。そんななか吉本氏が、過去に向かつて日本を世界に開こうとしているのは、九〇年代の緊急課題という意味がある。

日本をその世界性においてとらえ直す。それは大切だ。ただしそれは「起源」（母型）でなければならぬのか？

「母」系優位の初期社会が、男女の性交と「母」の受胎・妊娠・出産との関係性を認知できないところから由来している（百十八頁）といった前世紀の人類学流の主張に、私はついていけない。性交の否定は無知でなく、われわれの社会と同様に複雑な初期社会の「イデオロギー」の産物だと思っただけである。

必ずしも「起源」にこだわるす、時間・空間のなかに多方向にたどることで、日本文化の世界性を新たに探り直していくこと。私は本書から、そんな課題を受け取った。（学習研究社・一、八〇〇円）

1995-49-7/10

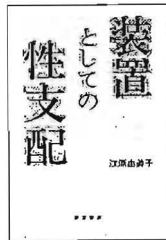
15 読書 12版

平成7年(1995年)2月28日 火曜日

産経新聞

装置としての性支配

江原由美子著



六〇年代アメリカに始まり、わが国でも大きな流れとなったフェミニズム「第二の波」の、主要な論者のひとり江原由美子氏の第四論集である。本書の焦点はやはり、著者と上野千鶴子氏との論争(九一年)だろう。当時の論考が収められているほか、上野・江原論争への中間総括という副題の書き下ろし論文「装置としての性支配」が巻頭を飾っている。これらを通読することで、日本のフェミニズムがいまどのような地点にさしかかっているのか、そのおおよそを掴むことができる。

行き違いや勇み足もあった論争を、《社会理論としてのフェミニズムの位置がどこにあるかをめぐる論争》として再提起したい、と著者は言う。そして、無償の家事労働や職場での男女差別など《労働の問題》を説明してきた上野氏からマルクス主義フェミニズムを評価しつつも、それと別な《身体の問題》、すなわち家族やあらゆる日常場面での《社会的権力》が作用し、《自己決定権の侵害》が生じることを《性

支配》の実態だとする。そして、これを見出したのが、ラディカル・フェミニズムの大きな功績だったとする。

江原氏は《性支配》を、性別カテゴリーにも社会経済的地位などの客観的条件にも還元しないで理論化することを目指しているが、その詳細はまだラフ・スケッチの段階だ。上野氏の批判に応酬した九一年の論文はとて奥切れがよいが、そのあとだんだん論旨が難澁になっていく。《社会的権力》の理論化はそれだけ手強いのである。

われわれの社会に性差別があるのは確かだが、それは果たして《性支配》なのか。上野氏も江原氏もそれを実証しようとして、別々の作戦を立てたとみえる。そこで江原氏が重視した《自己決定権の侵害》は、リベラル・フェミニズムでも扱えそうに思うし、その《侵害》のメカニズムには、性別カテゴリーも深く関与している。もう少し柔軟に構えておいたほうが、理論化の可能性が広がるのではと思った。

(勤草書房・二九八七円)
東工大助教授 橋爪大三郎

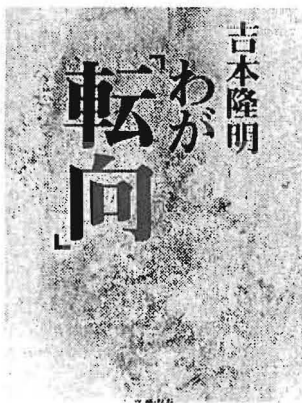
対上野千鶴子論争の中間総括

1995-49-②/10

1995年(平成7年)4月2日(日曜日)

第18903号(日刊)

BOOK



吉本 隆明

わが
転向

わが「転向」

吉本 隆明著

思想遍歴を素直に述懐

「わが転向」とはショッキングな題だが、これは編集者のつけたもの。中身は著者・吉本氏の素直な述懐である。著者の思想遍歴をまとめてみると、こうなる。①軍国少年・吉本氏は、戦争で死んでもいいと思いつめていた。②敗戦で、正義の戦争が実は愚劣だったと思ひ知らされたが、憲法9条と引きかえならいいと思った。③安保では醒(さ)めていたが、学生を理解できなかった。④七二年ごろを境にマルクス主義・左翼が効力を失ったので、大衆文化や都市と本格的取り組みに現在に至った。戦後をリードし続けた氏の遍歴に、柔軟さと強靱(きようじん)さの類(たぐい)まれなバランスを感じる。氏に異論を挟む人ひとさえ、自分の位置を測るのにこつそり吉本氏を参照している場合が多い。吉本氏は一冷戦体制が崩壊するずっと以前に、マルクス主義・左翼思想の解体を実践した思想家」として、後世から評価されることになる。氏は全学連主流派を評して、《ソビエトとアメリカという両体制：双方から押し潰(つぶ)されず、どちらの様式も取らなかったという意味では、彼らのやり方はいっばん妥当なもの：でした》(十二)とのべている。これは吉本氏自身のことでもある。氏の歩みは、知的世界のなかにその表現を与えられないまま、黙々と戦後の現実を築きあげてきた無名の大衆の営為を代弁した。このことは、氏が左翼の官僚制に反対し、《大衆の原像》にこだわり続けたことと符合する。

私が吉本氏に感じる唯一の異和は、氏が権力を肯定する論理をいっさい持ち合わせていないことだ。政府をリコールできることが大切だとか、自衛隊を合憲と云うべきでないとか、政治の終焉(政治が町内のゴミ当番みたいなものになること)をイメージすべきだとかいった部分に、戦後の刻印を感じる。

柄谷行人、浅田彰氏が吉本氏の「転向」を批判したのに対し、氏は《マルクス主義の否定的批判をしない：姑息な知識人》と切り返した。両者のどちらに心があつたか、いずれ歴史が裁定を下すに違いない。

橋爪 大三郎・東工大助教授
(文芸春秋 一一〇〇円)

北海道新聞

発行所

北海道新聞社

札幌市中央区大通西3丁目6
電話 011(221)2111 〒060-91

読者センター
011(210)5888

橋爪大三郎氏の書評に答える

本紙1月27日号の一面に掲載した宮台真司氏の著作『制服少女たちの選択』の書評の最後で、評者の橋爪大三郎氏は、宮台氏が分析に用いた社会システム理論にふれて、「こんなに日本的でもないのだろうか？」と疑問を投げかけた。この疑問に答えて、著者の宮台氏から「『日本的であること』こそ『普遍性の証し』だ」とする反論が寄せられた。社会理論のあり方をめぐって、橋爪氏と宮台氏との間で始められたこの論争、今後どのような方向へ発展していくか注視していきたい。

(編集部)

私が確信的にやりたかったこと

九三年秋に朝日新聞上でなされた「ブルセラ論戦」や、そのあとに続いたいくつかの論争で、たとえば奥井智之氏や松原隆一郎氏といった方々が、宮台はブルセラ女子高生たちと「公共的」なものの見方を共有しているというように、側から言っているように聞こえてきた。たまたまこれら批判が、私には同じように奇妙に響く。なぜかという点、前者は「普遍的立場」とありえないというものが社会システム理論の命題であり、そういう普遍的立場があるのかという疑問に、戦後知識人的な言説に

に立ち上がったからこそのであり、後者については、日本に作動するシステムの高み」に誰も立てない以上「制服少女」(第6章)、「倫理を説き回って自分だけ満足するよりは、日本的なシステムに内属した場所からまさしく『日本的に作動するシステム』に対して実効性のある言



宮台 真司氏

システム理論をめぐる「枢軸の逆説」 実効性のある言葉を紡ぎだすために

宮台 真司

こそ、「知識人共同体」にしか通用しないといえるか通用しない、その意味で私たちが日本のシステムの実を最も貧しいローカルティーの産物だというのが、一連の論争で言いつづけた。そのうえで私は、ありえない「高み」に立ち上らない言葉や自分を免罪しない言葉や、それを実効性のある言葉として、そのシステムに力がない(いやそれさえも疑わしい)「戦後知識人的な物言ひ」に自閉するだけの「知識人共同体」と「公共的」であるよりも、女子高生たちと「公共的」であるほうがはるかにマシだと「価値判断」した。それが、制服少女たちと大差ない私(松原隆一郎)は「ブルセラの兄貴」の選択だったということである。

橋爪氏は「同じやり方で異なる社会システムが分析できる」かどうかと疑問を呈するが、△同じやり方という言葉をどの水準を指すかによって答えは違ってくる。たとえば「人をみて法を説く」という△やり方があったとして、ある人に対して有効な法の説き方が別の人に無効だということでは確かに△同じや

ある。普遍理論はあくまでロケたということだ。これは偶々ではありえない。何が起きているのだろうか。橋爪氏の「論敵」ハバマスらが肩入る市民社会的な普遍思想を、本人に学習させて各自選択してもらう社会的啓蒙のほうで実効的であらざるを得ない」という△社会システムの作動の実態を説くのが、まさに社会的啓蒙それ自身である、という自己言及によってまさしく「閉じている」。とするなら、システム理論がいかに無意味に見えるとしても、それはその正当性は端的に「無根拠」であり、それが実効的なコミュニケーションに結びつくかどうか(むしろ社会システム理論は実効性に結びつく)と「主張」するのだが、「現実による審判」を待つしかないことになる。

結局、私がイライラするのは、△あらかたの国内言論が、いま述べたような問題について△鈍感すぎることに、いかえれば(それを採用するかどうかはともかく)別のやり方が存在する可能性について想像力をめぐらすことさえしないその「怠惰ぶり」なのだ。(みやだい・しんじ氏 東京都立大学助教授・社会学専攻)

人文科学
15W-S04

悪の哲学ノート

中村雄二郎 著

日本人の苦手な「悪」を考えるためのノート
橋爪大三郎 (東京工業大学助教授 社会学)



題名から、悪についての徹底した哲学的考察を期待した読者は肩すかしを喰うだろう。本書はあくまでも「ノート」なのだ。著者は、悪と関係のありそうな著作を渡り歩く。いったい著者自身はどう考えているのと幾度も尋ねたくなつたが、最後まで答は見えてこない。西田幾太郎をはじめ、善についての研究は山ほどあるが、悪の研究は少ない。これが本書を思いついた動機だと、著者は言う。たしかに日本人は、悪を考えるのが苦手だ。着眼は悪くない。だがそれにしては、悪を哲学するための道具が不足している。

正統の西欧哲学は、悪を「善の欠如」と規定してきた。いっぽう著者は、悪を「存在の過剰」と考えるグノーシス派や、ヨハネ黙示

録を反キリスト的テキストと考えるD・H・ロレンスをヒントにする。

本書の前半はこうした道具だての紹介であるが、後半はドストエフスキーの小説に話がつく。このつながりがよくわからない。「悪」をはじめとする作品に、黙示録の寓意がちりばめられているというのが著者の指摘だが、「悪の哲学」はほとんど展開されておらず、小説のプロット紹介が大部分のページを占めている。

「悪」といふ先にした、哲学散歩、文学散歩として、本書を楽しむ読者もいるだろう。あいにく私はそんなに暇でない。編纂を考えているという著者には、ずばり悪の核心を突く展開をこそ期待したい。

『悪の哲学ノート』●中村雄二郎著／岩波書店刊／3,000円
中村雄二郎氏は1950年生まれ、明治大学教授(専攻フランス哲学)。著書に『悪の哲学の現在』(岩波ランダム)、『悪の哲学の現在』(岩波ランダム)など。また、『中村雄二郎著作集』(全10巻)がある。

BOOK REVIEW

『建築文化』第50巻第 581号 95年 3月発行 pp.214 彰国社

1995-49 ④/1

入門書を超えた建築入門書

橋爪大三郎

薄手の新書でありながら、周到な構想のもとに書きあげられた、重量感のある一冊。著者の道案内で頁を繰っていくだけで、なんの予備知識のない読者でも、建築の概念や、その歴史、背景となる時代思潮について、コンパクトで体系的な知識をうることができる。

著者・隈研吾氏は、「グッドバイ・ポストモダン」という本もある、元気のよい若手建築家だ。現代建築が迷走の果てに行き詰まり、深刻な危機にあえいでいる現状を、彼はまず引き受ける。そして、この混迷を乗り越えるため、あえて建築の原点に立ち戻ってみようという戦略的な「足場固め」の狙いが、この一見するとじつに初歩的な入門書の背後に隠されているように思った。

著者による建築の定義は、まことに明快だ。建築とは、構築である。構築であるからには、主体が意志して行なうことである。構築は物質的素材を必要とし、その内部に空間を実現する。

こうした見方は、建築の世界ではすでに言い古されたことなのかも知れない。しかし、著者の要約はじつに的を射ており、柔軟な思考の足腰を感じさせる。わかりきったようなことでも、それをわかるように表現するのは大切だと思う。

となれば、建築はシェルターではありえない。したがって洞窟は、建築ではない。それは構築ではなく、分節されない内部空間があるのみで、形態がないからである。

建築は、メンヒル、ストーンサークルといった巨石を、垂直に直立させた新石器人とともに始まる。それは、重力に抗する構築、柱なのだ。その上に平石を渡す楣（まぐさ）構造、丸石を積み上げるアーチ構造も、この時期出現する。内部空間

の誕生である。

そのあと、ギリシャ建築→ローマ建築→ゴシック建築→ルネサンス建築→……と展開する建築史の流れはたぶん、世界中の大学の建築学科で講義される標準的な内容なのだろう。著者もあえて、通説から極端に逸脱する見解をのべてはいないようである。しかし本書のよいところは、まず、そのバランスの良さ。思い切り材料やエピソードも切りつめて、ぎりぎりのエッセンスだけをのべていく。第二に、論理の筋が一本通っていること。自己矛盾に陥り、そこからつぎの展開を生み出す建築史のダイナミズムを、著者がしっかり押さえている。こうしたことは、執筆の動機がきちんと意識されているからこそ可能である。そう、本書はまことに構築的で、それ自身があたかも建築であるかのように感じられる。

ギリシャ建築は、神殿建築で、外部形態が整ってあればよかった。内部が円柱だらけで狭くても、問題とはならなかった。ローマ建築は、内部空間を人びとに開放した。アーチやドームを多用した建築は、外部形態と内部空間の統一を目指した。ゴシック建築は、アリストテレス→スコラ哲学の体系に照応する。全体は部分に分割され、さらに細かな階層に再分割される。その内部空間は、非物質的な、純粋な内部空間にどこまでも近づこうとした。

ゴシック建築の構造は、中世スコラ哲学に対応する。だから、ウィリアム・オッカムら唯名論者（普遍は実在しないと主張する人びと）のまき起こした普遍論争がやがてスコラ哲学を解体させたように、ゴシック建築も透視図法（新しい主観主義）の登場とともに終焉をむかえたのだ。こうしてミケランジェロが登場する。彼にとっては建築も彫刻と同じで、自分の主観のみを手がかりに物質にたち向かう作業にほかならない。

ヨーロッパの建築史と思想史を、一体のものとして追えるのが、本書の嬉しい点である。たとえば、「反宗教改革によって、再び生気をふきかえした普遍こそが、バロックを生み出した」《啓蒙主義の建築的な対応物は新古典主義であった》《構築物に対する外部の優位性と、カントが唱えた意志と物自体の切断とは、同義である》《モダニズムとは……マルキシズムとフッサールの実存主義の間に宙づりにされた建築運動であった》《モダニズム以降の建築は、保守化の途をころげおちていった。ポストモダニズムの建築とは、その保守化のひとつの到達点であった》といった明快な断定は、単なるキャッチフレーズでなく、なるほどと思わせる考察に裏打ちされている。建築もひとつの表現である以上、ヨーロッパ文化の総体を離れて理解できるわけがない。本書の簡潔な指摘から、読者は今後掘り下げるべき多くのヒントを受け取ることができる。

さて、最後に強いて難をあげれば、やはり本書も「西欧」建築史でしかないこと。桂離宮の平面図が1枚紹介されるきりで、アジアやそれ以外の建築がほとんど触れられていない。イスラム建築は、多柱室の伝統を受け継いだと位置づけられ、「イスラム教の本質にひそむ非構築性が、この多柱空間を生み出した」とあるが、広々とした内部空間をもつモスクはどう考えればいいのか。

建築（構築という行為）は、自然の殺傷であると同時に、自然への捧げ物であった。それゆえ脱構築の思想（構築への批判）によって、建築は原初の問いにひき戻される。《構築にかわる建築の方法論というものが、果たして可能であるのか。……この問いがわれわれを押しつぶすところまで来ている》とのべる著者だが、これをはねのけて前進することを期待しよう。

（はしづめ だいさぶろう 東京工業大学助教授・社会学）



ちくま新書016
新・建築入門——思想と歴史
隈研吾＝著

筑摩書房 | 1994.11 | 新書判 | 224頁 | 680円